

「世界から見たあすの会」を語り続けて

元常磐大学学長 諸澤 英道

私は2000年1月の飯田橋での設立大会から今まで、全ての大会でプログラムの最後に話をするを求められてきました。

2000年1月の設立総会のことは、今でも鮮明に覚えています。たくさんの方が全国から参加されて、熱気があって、酸欠状態で気分が悪くなる方もいらっしゃいました。当時は、集まってくる被害者が撮影されないようにするために相当苦労されていました。

私は15回目まで、常に、あすの会が社会からどう見られているのかという事を話すよう求められ、そういうスタンスで話をして参りました。特に最初の頃は、あすの会は、学者たちからは、かなり批判的に見られていました。現に学者の中で、あすの会の身内になっているのは私だけでした。私と岡村先生の間には「赤い糸」のようなものがあったように思います。その赤い糸は、「犯罪被害者の権利」という言葉ではなかったかという気がしています。

ところで、先ほど岡村先生のお話にありましたけれども、「傷ついた被害者が、体に鞭打ちながら先頭切って政府に訴えかけ、制度を変え、法律を作っていくような国は、日本が最初であって最後であってほしい」という言葉は、物凄い言葉だと思うのです。

世界被害者学会の理事会で、岡村先生に基調講演をしていただきたいということになり、講演の最後に

なって、この言葉が突然飛び出したのです。会場にいた500人以上の外国人が、一瞬ぼかんとした瞬間でした。多くの方が、すぐには理解できなかったようです。欧米諸国の被害者運動（Victim Movement）というのは「支援者による被害者のための運動」なのですが、日本では「被害者による被害者のための運動」でして、そもそもベースが違うことが岡村先生の講演でようやく伝わったということです。

岡村先生と初めて一対一でお話したのは、あすの会結成の前の年の1999年の秋のことで、丸の内のあるクラブでふたりだけで食事をしました。あすの会を結成することについてお話を聞いたのは、この時でした。

ところが昨年春、先生は、17年前に初めて話し合いをしたその場所を指定して、「会いたい」と言ってこられたのです。もう、解散を決心されているのだということは、誰でも分かることです。その時、私は、ただ一言「分かりました」とだけ言って、後は、17年間の思い出話に終始しました。

結成からしばらくの間は、被害者でないのは、私だけでした。しかし、私は、あすの会に関わることで、研究者としての人生に物凄くたくさんの貯えをいただきました。それらを頭の中で消化し、反芻して私の財産にさせていただいています。

会計報告・議長退任の言

会計報告

副代表幹事 渡邊 保

当会の財務は、規約22条に「本会の財務は寄付金による」と定められていますように、寄付金によって運営されてきました。18年間の寄付金の総額は約2億2600万円となりました。あすの会を支援するフォーラムをはじめとする当会にご寄付いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2017年度までの決算ですが、主な支出としては、2度のヨーロッパ調査、それに伴う研究費及び全国署名活動費5000万円、ニューズレター発行など広報関係費3000万円、大会、会議・旅費その他の活動費約

6200万円、通信費2200万円、事務用品・消耗品費、事務所運営維持費約5400万円などで、支出総額は約2億1800万円です。

今年度に繰り越した金額は約800万円です。この繰越金からは、本大会の費用やニューズレター最終号の発行・発送費と清算業務の費用などを支出いたします。

あすの会は、本年3月11日の大会で、第26条に当会の存続期間は本日までとする規約改正をしました。同時にその第27条に、本会は、存続期間が終了した時は清算するものとし、清算が終了するまでは、清算の目的の範囲内において、なお存続する。となっております。以上で会計報告を終わります。